

## ヒルファディングの第一次大戦観

河野 裕 康

はじめに

ドイツ社会民主党(SPD)は第一次世界大戦の勃発に際し、いわゆる「城内平和」によって戦時体制に協力した。だが開戦当初から党内では、党の政策や大戦の性格規定などをめぐって激しい論争が展開され、反対派は党執行部の戦争協賛を強く批判した。党の理論的指導者R・ヒルファディングも反対派の重要な論客の一人として、論戦に加わった。彼はたんに著名な経済理論家というだけでなく、党中央機関紙『フォアヴェルツ』の編集を通じて、党の活動に深く関与していた。現に大戦中には『フォアヴェルツ』での彼の活動が、論争の一つの争点ともなった。

だが大戦下では検閲による言論規制や、党大会の無期限延期等のゆえに、論争は公に自由には行われえなかつた。そうしたこともあって戦時下の党内論争は、これまでに十分には検討されてこなかったように思われる。またヒルファディングが大戦中にいかなる思想的立場をとったのかも、必ずしも明らかでない。それゆえ本稿では前稿<sup>(1)</sup>にひき続いて、ヒルファディングに焦点を当て、開戦当初の党内論争と、そこでの彼の立場の意義を論じてゆきたい。

以下ではまず開戦直後の一九一四年九月と、一九一五年一月の党委員会におけるヒルファディングらの論争を検討する。党委員会は、周知のように、一九一二年のケムニッツ党大会で設置された。この委員会は、「地区お

よび邦執行部から各一名の代表によって構成され<sup>(3)</sup>、党執行部や機関紙代表、労組代表なども加わって会議を開いた。戦時下で公開論争が困難な中で開催された党委員会では、党幹部と地方代表が率直に意見交換したのであり、その意味でそれは、「党内世論のパロメーター」<sup>(4)</sup>であった。また党委員会は、ヒルファディングが公に発言した数少ない場の一つであった。それゆえこの委員会の論争を検討することは、党の動向を知る上でも、またヒルファディングの思想的立場を知る上でも不可欠であると思われる。そして本稿ではさらに、ヒルファディングの党委員会外での発言、機関紙活動、論文等をあわせて検討することによって、彼の大戦観を明らかにしてゆきたい。

(1) Cf. *Protokoll der Sitzungen des Parteiausschusses*, 20/21. Juli 1916, S. 14.

(2) 拙稿「帝国主義の必然性をめぐる論争——第一次大戦下のヒルファディング」、『種瀬茂編『現代資本主義論』』青木書店、一九八六年、参照。

(3) *Protokoll über die Verhandlungen des Parteitages der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands*, 1912, S. 556.

(4) S. Miller, *Burgfrieden und Klassenkampf*, Düsseldorf, 1974, S. 77.

#### 一 開戦直後の党委員会

一九一四年九月二七日に、開戦後初の党委員会<sup>(1)</sup>が開かれた。会議には五〇余名が出席し、ヒルファディングも『フォアヴェニルツ』編集部代表として参加した。ここでのような論争が展開されたかを、まず見てみよう。

会議では最初に党執行部のF・エーベルトが、戦争に対する党の立場を説明した。彼によれば、SPDはこれまで一貫して軍国主義に反対し、反戦活動を行ってきた。だがそれにもかかわらず戦争は勃発し、我々は「不可避免的な恐るべき現実」に直面した。「戦争に対する党の立場は、帝国議会議員団の声明に示された」(S. 3)。我々は戦争中でも、侵略政策に反対することに変わりはない。我々は軍事的事情には考慮を払うが、しかし政治的発言や批判の権利は、いかなる場合にも保障されねばならない。とにかく戦争という困難な状況では、党活動がいつ不可能となるかわからない。それゆえ「我々は、組織をできるだけ強く維持するために、全力を尽くさねば

ならぬ」(S. 5)。

このようにエーベルトは、戦争に対する党の立場が、八月四日の議員団声明に言い尽くされており、開戦後も党の原則が何ら変わっていないと主張した。そして彼は、当面党の組織防衛を最優先すべきだと論じた。

会議はその後一般討論に入り、出席者の間で論争が繰り広げられた。まずJ・メールフェルトは、ベルギーでのドイツ軍の行動を問題にした。周知のように、ドイツは開戦とともにベルギーの中立を侵犯し、同国に軍を展開していた。彼によれば、「ベルギーではドイツ兵は嫌われており、国民軍が支持されている」(S. 8)。それゆえ政府および党は委員をベルギーに派遣して、同国の実情を明らかにすべきである。そのことは、今後のインターナショナルの協力関係にとっても重要である、と。

R・デイスマンも「メールフェルトのベルギーに関する提案を支持」(S. 6)して、次のように述べた。ドイツ兵士からの手紙によれば、我々がとても正当化しえないような事態が生じている。我々は戦中も批判的な視点を保持しつつ、排外主義的愛国主義に陥らないようにせねばならない。我々の任務は、平和のために行動し、併合

に反対することである。

こうした発言に対してR・ライネルトとW・カイルが、党執行部擁護の立場から反論を加えた。まずライネルトは、外国の党の態度こそ問題だ、と主張した。ベルギーでのドイツ軍の行動よりも、むしろ東プロイセンでのロシアの「残虐な行為」こそ調査すべきである。党機関紙には、併合政策に反対する論文が載っているが、そもそも「この世界戦争が、併合なしに終わらうなどと考えられるだろうか」(p. 10)。このようにライネルトは、領土併合を是認するかのとき主張を行った。

カイルも、ベルギーへの委員派遣というメールフェルト案に反対した。委員を派遣しても、正確な情報が得られるかどうか疑わしい。自分は現在の党の態度に満足しており、また「党員の大多数も、議員団の戦術を正しいと考えていると思う」(p. 10)。併合に反対する集会も試みられているが、そうした集会は今のところ「時宜を得ていない」。K・リープクネヒトは議員団を公然と批判しているが、彼の勝手な振る舞いは、党の統一を損ねる。むしろ党全体は、機関紙も含めて、議員団決議の方向で団結すべきである、と。

論争はさらに続き、H・レーバーもベルギー問題を取り上げた。「ベルギー人は、ベルギーの中立が侵犯されねばならなかったことの意味を、理解しえない」(⑤、⑥)。今や党機関紙の大半は、戦前に述べていたことと「逆のこと」を主張している。古くからの党員は、議員団の行動を理解しえない。

そしてH・ハーゼは党執行部内の反対派を代表して、次のように述べた。「併合問題に関するライネルトの考えは、批判されねばならない。なぜなら彼の考えは、我々の原則に違反しているからである」(⑦、⑧)。我々の民族自決権の要求は、いかなる併合政策とも相いれない。また党はこれまで、中立侵犯を正当化したことは一度もない。他方カイルの発言については、党機関紙は慎重に行動すべきだが、「自ら正しいと思わない決議を、無理に擁護する必要はない」(⑨、⑩)。

このようにハーゼはライネルトの併合容認論を批判し、ベルギーの中立侵犯も含めて、党がいかなる併合にも反対であることを強調した。そして彼は、党機関紙の議員団決議への服従を要求するカイルに反論し、党紙の自主的判断の余地を認めた。

さてハーゼに続いてヒルファディングが、『フォアヴェルト』を代表して発言した。彼によれば、メルフェルトの議論は極めて重要である。メルフェルトは「慎重な」党機関紙を擁護している。だが今日ではもろもろの党機関紙は、軍当局と一体化してしまっている。問題は議員団の態度だけではない。「議員団が公債に賛成した時、大衆もまた確かに議員団を擁護していたように思われる」(⑪、⑫)。反ツァーリズムの合言葉は、大衆の気分とも合致していた。とはいえそのことは、『ハンブルガー・エヒョー』のような個々の機関紙の態度を、正当化するものではない。「この戦争の内容は、南スラブ民族に対するマジャール人の支配を維持することである」(⑬、⑭)。しかもヨーロッパはこの間すでに、独英を中心に二大陣営に分裂している。いずれにせよ併合は新たな軍拡競争をもたらすがゆえに、併合せ論は断固克服されねばならない。

見られるようにヒルファディングは党中央機関紙の立場から、同じ他の多くの党紙が軍に追隨していると批判した。そして彼は、議員団のみならず、大衆も戦時公債を一定程度は認めたことを認めつつも、だからといって

各党紙の態度が肯定されるわけではないことを強調した。彼は、東欧での民族支配や独英対立など戦争の性格にかかわる問題を取り上げて、併合戦争に強く反対するよう主張した。

これに対してエーベルトは、以下のように論争を総括した。すなわちヒルファディングは「予期に反して」、戦争の原因を論じようとしている。「我々は、各国の帝國主義こそ究極的原因であるとするヒルファディングの見解を、しばしば聞かされた。だが問題はそんなところにはない」(S. 11)。重要なのは、開戦直前のドイツの状況であった。当時我々は脅威にさらされ、自ら防衛せねばならなかった。開戦後の経過も、我々の行動の正しさを証明している。ロシアは数か月も前から、戦争の準備をしてきた。我々は併合政策を拒否するが、今は反対運動を行う時期ではない。ベルギー問題に関しては、委員を派遣したからといって、正しい情報が得られるとは限らず、またもし委員を派遣するならば、東プロイセンにもやはり同様の措置をとらねばならない。戦争と党の關係を論ずる党員集会は、現状では困難であり、その開催を呼びかけることはできない。

このようにエーベルトは、ヒルファディングのごとく戦争の原因を論ずることを意識的に避け、むしろ緊急の課題として国防の重要性を説いて、党議員団および執行部の立場を正当化しようとした。そして彼は併合に反対であることを主張しつつも、今は行動の時期でないとして、慎重な対応を要請した。

以上で開戦直後の党委員会の論争を見てきた。反対派は特にドイツによるベルギーの中立侵犯を取り上げることによって、反併合という党の原則と、現実の中立侵犯および併合政策の容認との矛盾を追及した。大部分の党機関紙は、戦前までと「逆のこと」を主張しており、まさに党の原則を放棄してしまったのではないか。反対派は、党が反併合の立場を明確にし、即刻平和のための行動をとるよう主張した。

これに対して多数派は、八月四日の議員団決定および党の政策が正しい選択であり、しかも大衆の圧倒的な支持を得ていると主張した。彼らによれば、党の現在の政策は何ら原則の変更ではなく、ただ戦時下での祖国防衛という緊急課題に対応したものに他ならなかった。併合問題では、ライネルトのようにあからさまにそれを容認

するものもいたが、大多数は反併合の立場を再確認した。だが彼らは、今は反対運動を行う時期でないと考え、当面は「勝手な」行動を差し控え、党紙も含めて党全体が議員団声明の方向で結束し、組織維持を最優先すべきだと主張した。

ヒルファディングは反対派の側に立って、党の政策を批判した。彼も、大衆が議員団をある程度支持していることを認めたが、それによって党指導部の責任が免罪されないことを指摘した。そして彼はこの会議で、ほとんど唯一大戦の性格を問題にした。彼は、エーベルトが意図的に触れなかった「戦争の原因」を取り上げ、この戦争の発端がオーストリア・ハンガリー帝国のスラブ支配にあること、そしてそれがたんに局地的な対立にとどまらず、独英を中心としたヨーロッパ全体の二大陣営の対立と結びついて、世界戦争へと発展していったことを示した。まさにエーベルトの言葉にもあるように、ヒルファディングは大戦の根本原因を「帝国主義」に見た。彼はそうした立場から、併合政策に断固反対するよう主張したのである。

さてこのころの党委員会外でのヒルファディングの言

動は、どうであつただらうか。彼は当時、右派から概して穏健な人物と見なされていた。A・ジューデクムはヒルファディングを、『フォアヴェルツ』編集部の中で「最も慎重な人」と見ていた。<sup>(2)</sup> またE・ダーフィットの伝えるところによれば、E・コーエンロイスは「ヒルファディングを、非常に気立てのいい人物と見なしている」<sup>(3)</sup>。ヒルファディングは他人の影響を受けやすく、一番最後に自分に働きかけてくる人の意見に従う、と。

だがヒルファディングは、こうした与しやすい人物との世評よそに、明確に多数派批判を行った。彼は『フォアヴェルツ』編集部の声明を通じて、八月四日の戦時公債承認にいち早く抗議した。<sup>(4)</sup> また『フォアヴェルツ』は開戦後間もなく、その反戦的論調のゆえに、二度にわたって発禁処分となった。ことに九月二八日の同紙の処分のきっかけとなったS・ネストリーブケ論文に関して、ダーフィットは、「この若者(ネストリーブケ)はすでに完全に、シュトレイベルとヒルファディングの影響下にある」<sup>(5)</sup>と述べている。ちなみにこのころ、機関紙に対する党内の規制もしだいに厳しくなり、一月には反対派の地方紙『シュヴェービッシェ・タイクヴァハト』は、

ヴュルテンベルク邦執行部の指示により、編集長の地位を右派のW・カイルに握られることになった。<sup>(6)</sup>

そして十一月三〇日のSPD議員団会議では、ベルギーの中立侵犯に抗議する決議案と、中立国の講和斡旋を受け入れるよう政府に要求する決議案が出され、「ヒルファディングやリープクネヒト……らは、あらゆる手段を用い<sup>(7)</sup>」た。だが、この決議案は、いずれも否決されてしまった。またこの会議は、周知のように、八二票一七票で第二回戦時公債案に賛成することを決定した。<sup>(8)</sup>翌月二日の帝国議会でリープクネヒトは議員団決定に反して、戦時公債に反対投票し、かくして党内対立が公になったのである。この間ヒルファディングは、こうした党内対立の深まりの中で、党の分裂を危惧していたものと思われる。すなわち、V・アードラーは次のように伝えている。「特にヒルフ〔アディング〕はもろろんベノ・カルベレスの頭を、さし迫る『分裂』等のはかげたことで一杯にしました。しかし私はそんなことを信じません<sup>(9)</sup>」。

このようにヒルファディングは党委員会内のみならず、『フォアヴェルツ』での編集活動や議員団への働きかけを通じて、戦時体制を批判し、反対派の立場を明確にし

ていった。

(1) *Protokoll der Sitzung des Partiausschusses*, 27. Sept. 1914.

(2) 前掲拙稿「三一七頁参照」。

(3) *Das Kriegstagebuch des Reichstagsabgeordneten Eduard David 1914 bis 1918*, Düsseldorf, 1966, S. 16.

(4) 前掲拙稿「三一七頁以下参照」。

(5) *Das Kriegstagebuch*……, S. 46.

(6) *Cf.*, F. Osterroth, D. Schuster, *Chronik der deutschen Sozialdemokratie*, 1 Bd., 2 Aufl., Berlin, 1975, S. 166.

(7) *Das Kriegstagebuch*……, S. 74.

(8) *Cf.*, *Die Reichstagsfraktion der deutschen Sozialdemokratie 1914 bis 1918*, Düsseldorf, 1966, S. 7.

(9) V. Adler an K. Kautsky, 26. Nov. 1914, V. Adler, *Briefwechsel mit August Bebel und Karl Kautsky*, Wien, 1954, S. 602.

二 一九一五年一月の党委員会

さて一九一五年一月二—三日に、次の党委員会<sup>(1)</sup>が開かれた。開戦後半年を経過し、戦争の長期化の様相が一段と濃くなる中で、党内対立も激化していった。こう

した状況の下で開催された党委員会では、特に『フォアヴェルツ』など党機関紙の態度や、リーブクネヒト事件を契機とした党内規律の問題、いわゆる「党内の城内平和」、そしてさらに戦争の性格規定と党の原則が議論された。ヒルファディングは『フォアヴェルツ』の代表として、論争の当事者となった。

今回の会議でも、まず執行部のエーベルトが基調報告を行い、それを受けて論争が開始された。彼は次のように主張した。ドイツの内政状況は、前回の会議以後ほとんど変わっておらず、したがって戦時公債問題について、今さら詳論する必要もない。八月の投票の際には、我々の国境が脅かされ、国民の安全が危険にさらされた。一月には経済戦争の激化もあって、この危険が一層増大した。「こうした緊急事態の下で一二月の公債承認は、八月四日における我々の態度の当然の帰結であった」(S. 20)。リーブクネヒトは議員団を離れて、一人反対投票を行ったが、これは「重大な規律違反」である。今後は議員団の一致団結した投票行動が、保証されねばならない。

しかも昨今、党委員会の申し合わせにもかかわらず、

党員集会等で議員団の態度が議論されるようになってきた、とエーベルトは言う。各地の私的な会合は党活動を侵害し、党員相互を対立させている。こうした状況では、「党内の城内平和」、すなわち党員集会で議員団の行動について議論しないという決議は、もはや守りえない。「それゆえ我々は、今日この決議の破棄を提案する」(S. 21)。とはいえ議論は公の場ではなく、あくまで党内の会議で、同志的精神をもってなされるべきである。いずれにせよ党は、戦後にこそ重大な任務に直面するのであり、そのためには、党の統一と団結が最優先されねばならない。

このようにエーベルトは、党をめぐる状況が開戦時と変わっておらず、したがって八月四日の政策の見直しが必要ないと主張した。彼は一二月二日のリーブクネヒトの行動を、規律違反として厳しく非難し、あらためて党の結束を呼びかけた。だがエーベルトも党内対立の激化を認めざるをえず、それゆえ「党内の城内平和」の破棄を提案することになった。

さてこうしたエーベルトの提起をうけて、まずA・ミユラーは以下のように論じた。党内で議員団に反対して



いるのは、ごく一部である。議員団は、平和問題に関して言うべきことは言った。今やインターナショナル事務局は、三国協商側の手段になりさがっており、SPDは彼らからの攻撃に対して反論せねばならない。また『フォアヴェルト』は、もはや党の中央機関紙とは言えない。『フォアヴェルト』は、ひたすら党の崩壊を切望しているかのように思われる」(S. 25)。

G・テーネも『フォアヴェルト』を批判した。『フォアヴェルト』は一般党員の激しい反対に直面している。「党執行部は最終的に、『フォアヴェルト』から中央機関紙としての資格を剥奪すべきである」(S. 26)。このようにミュラーもテーネも党執行部支持の立場から、特に『フォアヴェルト』を激しく非難した。

これに対してハーゼは次のように反論した。自分は基本的に、『フォアヴェルト』の立場を支持する。『フォアヴェルト』は、議員団を全面的に擁護する義務はない。なぜなら同紙は、議員団の機関紙ではないからである。陸軍相ヴァンデルは、『フォアヴェルト』の各紙面から聞こえてくる平和要求」(ibid.) について、不満を漏らしたが、自分は彼に、むしろ検閲の厳しさをこそが、同紙

の叙述を硬直化させていることを指摘しておいた。

リープクネヒトの行為は残念だが、しかし彼は決して、言われるようにロシアのために行動しているのではなく、党のために行動しているのである、とハーゼは弁護する。今日では「この戦争の帝国主義的意図が、ますます明らかになってきている」(S. 27)。ドイツ政府の戦争責任は、ドイツ自身の文書によっても明白である。またオーストリアがすでに開戦前年に、対セルビア行動を意図していたことも暴露されている。SPDはこの間政府の政策と激しく戦ってきながら、まさにこの政策が崩壊をもたらそうという段になって、公債承認で政府を助けようとしているのは、矛盾している。今ほど平和運動が切に求められている時はない。

見られるようにハーゼは、検閲下での『フォアヴェルト』の反戦姿勢を擁護し、またリープクネヒトの行動にも理解を示した。ハーゼによれば、党が戦前の政府批判から一転して、公債承認による政府支持へと変わったことの方が、問題なのであった。

多数派からの攻撃は執拗に続いた。ライネルトは、ハーゼが党首であるにもかかわらず、リープクネヒトの行

動を免罪しようとして非難した。リープクネヒトの行為はまったく恥知らずであり、規律違反として厳しく断罪されねばならない。またSPDの民族的排外主義が云々されているが、SPDほど外国人に寛大な党はない。中央機関紙をはじめ多くの党組織は、外国人の指導を受け入れており、彼らによって党内の意思形成がなされている。『フォアヴェルト』は党の方針を提起せず、重要なことについて黙したままである。『フォアヴェルト』は、国内で帝国議会議員団の立場の信用を……おとしめようとしている」(S. 28)。

それゆえ党は、別の情報伝達手段を見い出さねばならない。しかも「党内の城内平和」は、本来それから利益を得るはずの人々によって破られており、したがってもはや維持しがたい。このようにライネルトは反対派の規律違反を非難し、そして『フォアヴェルト』の態度を、外国におもねるものとして激しく攻撃した。

C・ゼーヴァリングも『フォアヴェルト』批判に加わった。『フォアヴェルト』ではベルリンの一部の少数派のみが発言しており、多数の労働者は無視されたままである。同紙に対してはしかるべき措置がとられねばなら

ないが、いかんせん党執行部内でも意見が一致していない。こうした対立状況の中では、「党内の城内平和は、廃止する必要もない。なぜならそれはもはや、存在していないからである」(S. 31)。

さてこのように『フォアヴェルト』の態度が争点になっている中で、同紙編集部の子ルファディングは、以下のように反批判した。ライネルトは特に『フォアヴェルト』編集部内の外国人(私)を攻撃するが、オーストリア人たる私は、決して敵対的な外国人ではない。そもそも編集部は、民主的にものごとを決している。「ちなみに私は、決定的な時期に当地にいなかった。私がおどってきた時、議員団はすでに決定を下していたのである」(S. 32)。私はむしろ編集部の見解に賛成した。『フォアヴェルト』の立場については、すでにハイゼが必要な弁明を行ってくれた。

今問題なのは、たんに資本主義の崩壊だけではなく、労働運動が権力への意思を持ち、社会の支配権を握る力を持っているか否かである、とヒルファディングは言う。労働運動がそうした意思を持ちあわせていないなら、社会主義の実現はずっと先のことである。また最近「労働

者階級と帝国主義の利害の共通性が喧伝されているが、それはかつての調和説の再来である」(ibid.)。それは、非社会主義的な英国労働組合の見解に酷似している。我々は、大衆を将来の闘争のために準備させようとしている。いったい我々が今政府を擁護しておきながら、戦後に大衆を反政府運動に立ち上らせることができるだろうか。党執行部は政府と協議を重ねているようだが、なぜもっと直接に大衆に訴えかけようとしめないのか。

『フォアヴェルツ』はベルリン党指導部の方針に沿って報道しており、決して一部の人々の組織ではない。我々は厳しい検閲下にあつて、自由に記事を書けるわけではない。もし別様の書き方を望むなら、別の編集部を作るべきである。また「私は党内の城内平和の廃止を求め、非常に残念に思う」(S. 33)。今あらゆる党员集会で、議員団の態度を議論し始めることは、党の利益となるだろうか。

このようにヒルファディングは、『フォアヴェルツ』編集部が民主的であり、自分が外国人として特別な影響力を行使したことなどないこと、しかも同紙は検閲下にあるながら、ベルリン執行部の方針に沿って報道してい

ることを主張した。また彼は資本主義の崩壊よりも、労働者の権力意思をこそ重視した。少数派は労働者を闘争に立ち上がらせようと努力しているのにひきかえ、多数派は労働者と帝国主義の利害統合を説いたり、政府を手助けしたりしている、と彼は批判した。

これに対して多数派は、ヒルファディングに集中砲火を浴びせた。P・シャイデマンは、『フォアヴェルツ』が中央機関紙としての自らの任務を完全に誤認している、と非難した。編集部は絶対的に独立しているのではなく、あくまで党の一組織として、党の方針に従わねばならない。しかも「ヒルファディングは、『フォアヴェルツ』編集部が戦時公債問題で完全に一致していると述べたが、それは正しくない」(S. 33)。例えばH・クローノーは、ヒルファディングらに対立しているからである、と。

またH・モルケンブーアも、ヒルファディングを論難した。すなわちヒルファディングらは、我々が調和説に基づいて帝国主義の側に移ったと非難しているが、そうした言い方は論外である。我々は確かに農業経営者よりも資本家の側に立ってきたが、それは資本家の利益を擁護するためではなく、そのことを通じて労働者の利益を

図るためである。その際、資本家が労働者よりも多くの利を得るかどうかは、別問題である。我々の帝国主義に對する態度も同様である。「帝国主義が実際に資本主義的發展の最高形態であるならば、我々は多くの具体的問題において、帝国主義の側に立たざるをえない。なぜなら我々は当然、經濟的後退でなく、たいてい經濟的進歩を支持するからである」(S. 38)。このようにモルケンブーアは、自分が資本家や帝国主義を支持するとすれば、それはヒルファディングの言うような調和説に基づくのではなく、むしろ經濟發展の見地から、労働者の利益のためにそうするのである、と反論した。

最後にエーベルトは、多数派の立場から以下のように述べた。SPDの立場はフランスの入閣主義とは異なつて、決して政府の政策に共同責任を負うものではない。我々が政府と協議するのは、抗議したり労働者の要求を主張するためである。「ヒルファディングは、我々が政府との協議を大衆に報告しなかつたと非難している」(S. 41)。だが我々は、いくつもの論文で報告しており、ただ『フォアヴェルツ』がそれを掲載しなかつただけである。戦争が帝国主義に起因するという見解には我々も

賛成であるが、「協商側の帝国主義もドイツ帝国主義に劣らず危険であり、責任がある」(ibid.)。ドイツは開戦を阻止すべく最大限努力したが、協商側がそれに応ぜず、かくしてドイツは祖国防衛の必要に迫られたのである。

このようにエーベルトは、対政府交渉があくまで労働者の利益擁護のためであると主張し、また戦争の帝国主義的性格については、むしろ協商側の攻撃的姿勢こそ問題だと論じた。こうした論争の後、党委員会は「党内の城内平和」の廃止を、反対僅か四票の圧倒的多数で可決した。<sup>(2)</sup>

以上で一九一五年一月の党委員会での論争を見てきた。エーベルトら多数派は、党をめぐる情勢が前回と基本的に同じであり、したがって政策の見直しは必要ないと主張した。ドイツは協商側によって脅かされたのであり、それに対して祖国を擁護すべく戦時公債を承認するのは当然である。むしろリープクネヒトや『フォアヴェルツ』の態度こそ、重大な規律違反であり、党の路線から逸脱している、と。このように多数派は、概して戦争の性格規定にはあまり深入りせず、党规律や組織問題といった形式面で少数派を批判した。そうした中でモルケ

ンブーアは、帝国主義が資本主義の最高段階なら、それを支持せねばならないというクーノー流の帝国主義擁護論を展開したのが注目される。

他方ハーゼやヒルファディングら少数派は前回同様、戦争の性格を積極的に問題にしていった。党は戦前から一貫して政府の帝国主義的政策に反対してきながら、いざ大戦においてその政策が破綻しそうな時に、公債承認で政府を助けるのは、矛盾している。大戦の帝国主義の本質がますます明らかになっていくからこそ、少数派の立場は、内容的に正當なのである。党紙はそもそも相対的に独立性を持っており、また党内の意見発表の自由も、常に保証されねばならない、と。

ヒルファディングはおもに『フォアヴェルツ』の立場から発言し、同紙編集部が自分の個人的な影響力とは無関係に、自主的に議員団批判の態度をとったことを指摘した。事実彼は開戦時には、そのオーストリア国籍ゆえに国外退去命令を受け、一時ドイツを離れていた。<sup>(5)</sup> それゆえ彼は、その時点で直接に編集部に影響力行使することは不可能であり、むしろ事後的に編集部を支持したものと思われる。そして彼は資本主義の崩壊より

も、労働者の主体性を重視した。彼は労働者と帝国主義の利害調和説を一蹴し、労働者大衆を将来の闘争に向けて準備させるよう主張した。

この委員会におけるヒルファディングの態度について、ダーフィットは次のように評している。すなわち、ヒルファディングは、来るべき社会革命の準備をせねばならないと主張することで、『フォアヴェルツ』の立場を正当化しようとしている。「ヒルファディングは、ドイツの敗北が予想されるがゆえに、社会革命の起こる可能性が非常に高いと考えている。—— こんなばか者が、党中央機関紙を指導しているのである」<sup>(6)</sup>。このように修正派のダーフィットは、ヒルファディングの考えを問題外として退けている。

ヒルファディングはその後間もなくオーストリア軍に召集され、以後党委員会には出席していない。しかし彼はオーストリアに移るまでの短い間、なお他の会議で戦争政策を批判し続けた。一九一五年二月四日の議員団会議に、議員でないヒルファディングも『フォアヴェルツ』の代表として出席した。<sup>(6)</sup> この会議では、平和行動を要求するG・ホッホの決議案が提出され、「ハーゼやカ

ウツキー、ヒルファディングらによって強く擁護された<sup>(7)</sup>。だがこの会議は厳格な秘密保持をとり決めていたため、議論の内容はつまびらかでない<sup>(8)</sup>。

またヒルファディングは二月五日の大ベルリン執行部会議でも、「戦争の原因」について報告した。ダーフィトの記録によれば、「ヒルファディングの報告は、ドイツの帝国主義的拡張傾向を、戦争の推進力と見なしている<sup>(9)</sup>」。とはいえヒルファディングはそれでもなお、人々がドイツ側を擁護しうることを認める。「彼はまた、経済的拡張がそれ自身必然であることを認識している<sup>(10)</sup>」。

このようにヒルファディングは、二月四日および五日の会議でも戦争の性格を問題にし、平和運動を提起した。だが両会議での彼の言動は、資料的制約ゆえに間接的にしか明らかでなく、それゆえ彼の真意がどこまで正確に伝えられているか定かではない。例えばここでダーフィトは、ヒルファディングが経済的拡張を必然として肯定しているかのように記しているが、同じ時期の帝国主義論争等を見る限り、ヒルファディングが拡張策を擁護することは考えられない<sup>(11)</sup>。

(一) *Protokoll der Sitzung des Partiausschusses*, 12/13.

Jan. 1915.

(2) Cf., *ibid.*, S. 42.

(3) 前掲拙稿「三一七頁参照」。

(4) *Das Kriegstagebuch*……, S. 96.

(5) ここでダーフィトは、ヒルファディングがドイツの敗北を予期していると述べているが、委員会での発言を見る限り、必ずしもヒルファディングが将来の闘争の前提として、ドイツの敗北を考えていたとは言いがたい。

(6) Cf., *Die Reichstagsfraktion*……, S. 35.

(7) *Das Kriegstagebuch*……, S. 102.

(8) Cf., E. Prager, *Geschichte der USPD*, Berlin, 1921,

S. 55.

(9) *Das Kriegstagebuch*……, S. 103.

(10) *Ibid.*

(11) 前掲拙稿「三二五頁以下参照」。

### 三 ウィーンからの寄稿

さてヒルファディングはオーストリアに移ることによって、機関紙活動や会議への出席が困難になった。彼の大戦に対する態度については、このころ彼がウィーンで執筆した二つの論文を検討することで、さらに明らかにしてゆこう。彼はまず「社会主義者の大戦観」(一九一

五年)を書いた。この論文は、M・アードラー著『原則かロマン主義か』(一九一五年)を書評する形で、自らの大戦観を示したものである。ヒルファディングはこの論文を、七月にウィーンから『ノイエ・ツァイト』に送っている<sup>(3)</sup>。以下では最初にこのアードラーの著作を瞥見し、しかる後にヒルファディングの論文を検討してゆく。

アードラーは次のように論じた。大戦中には原則を論ずべきでないと主張する人々は、まさに決定的歴史状況で自らの無能力を暴露している。今こそ「階級闘争の原則」が堅持されねばならない。問題は、「我々の理念が誤っていたのではなく、それが大衆の間に十分根づいていなかった」(S. 16)ことにある。戦争をもたらしたのは、国民的利益ではなく、資本家の帝国主義的利益である。帝国主義分析にとって「不可欠な著作」は、民族問題に関するO・パウアーの著書と、ヒルファディングの『金融資本論』である。今日では資本輸出が盛んに行われ、投資地域の最も安全な確保策として、植民地政策が遂行される。この政策を推進するために、強力な国家権力が必要とされる。「強い帝国、強い陸海軍、民族感情、

他のすべてに勝る自国への誇り」(S. 36)、これらは資本の拡張衝動の一面である。

アードラーによれば、帝国主義と労働者の利益を結びつける考え方は、労働組合主義者に多いが、それはブルジョア的な「従者の立場」である。また帝国主義が資本主義の最高形態であるがゆえに、社会主義の前提として極限まで発展させられねばならないとする考え方は、資本にとっての必然性と労働者にとっての必然性を混同する「お定まりの詭弁」である。

このようにアードラーは、大戦という厳しい試練の下でこそ、階級闘争の原則を堅持するように訴えた。その際彼は、ヒルファディングやパウアーらの帝国主義論に依拠しつつ、植民地政策、軍拡政策、民族的排外主義等の関連性を分析し、今次大戦も他ならぬ帝国主義の産物として把握した。そして彼は、帝国主義と労働者の利害の一致を説く立場や、帝国主義を必然としてそのまま認める見方を、詭弁として厳しく批判した。

さてヒルファディングはこのアードラーの著書を、どのような観点から書評したのでろうか。彼は、アードラーが戦時の思想的混乱の中で、原則を取り上げること

よって、問題を正しく提起したと評価する。ヒルファディングによれば問題は、労働者が開戦後別様に行動すべきであった、ということではない。「彼らは行動せねばならないように行動したのである」(S. 840)。また戦争をサポータージュするという考え方が「幻想」であることも、つとに指摘されていた。とはいえこのことは、決して現状の追認を意味しない。党がこうした厳しい状況を乗り越え、危険な政策を克服すべく正しく行動してきたか否かは別問題である。まさに「ブルジョア的イデオロギーへの社会主義の精神的屈服を防ぐこと」(ibid.)が、重要なのである。アードラーの著書は、この課題をよく果たしているというのである。

ヒルファディングはまた、アードラーが大戦の原因を国民的利益でなく、資本主義的拡張衝動に求めていることを重視する。資本家の利害と労働者のそれは、明確に区別されねばならない。「資本主義的發展にとっての必然性が、そのままプロレタリアートの政策の必然性に見なされねばならないとする誤った結論」(S. 843)こそ重大である。アードラーはこの点を明確にしており、その意味でカウツキーとクローノーの論争を「補完」してい

る。

そしてヒルファディングはアードラーに依りつつ、帝国主義的政策の労働者に及ぼす影響を詳論している。経済領域の拡大は、膨大な軍事費を必要とする。それは租税負担となって、労働者の肩にのしかかる。また軍事費の増大は、国家予算における文化的支出の削減につながる。そして軍国主義の蔓延は民主主義を制限し、市民的権利や自由を侵害する。さらに帝国主義の帰結たる戦争は、経済的犠牲のみならず人的犠牲をもたらす。このように帝国主義的政策は、労働者に多大の犠牲を強いるのである。したがってもし労働者大衆が、戦争で得るものより失うものの方が大きいこと、そして戦後もいぜんとして経済的不安定が続くことを認識するならば、彼らは帝国主義の幻想に惑わされることなく、社会変革という「唯一の打開策」へと向かうだろう。

以上、ヒルファディングの論文「社会主義者の大戦観」を見てきた。彼はアードラーの見解を紹介しつつ、党が階級闘争の原則を捨て去り、ブルジョア・イデオロギーに屈服したと批判した。彼は大战の資本主義的性格を強調し、そしてカウツキーとクローノーの論争を念頭に



置きつつ、資本主義にとっての必然性と労働者にとってのそれを峻別した。

帝国主義論については、アードラーはヒルファディングやパウアーに依拠していたが、ヒルファディングはそうしたアードラーの議論を再度敷衍して、帝国主義と労働者の関係を論じた。帝国主義は軍拡のための租税負担や、民主主義の制限、戦争の災禍等により、労働者に多くの犠牲を負わせるのであり、したがって帝国主義と労働者の利害調和論は、断固退けられねばならなかった。

ヒルファディングは結局、労働者大衆の自覚の高まりを期待し、党執行部もそれに向けて指導責任を果たすよう説いたのである。

次いでヒルファディングの「社会主義的中立性に関する中立的社会主義者」(一九一五年)を検討しよう。この論文は、おもにルーマニアの社会主義者C・ラコフスキの論稿(5)を素材に、党の態度を論じたものである。ヒルファディングはカウツキーあての手紙で、「ラコフスキの本はあなたの気に入るでしょう」と述べているように、この本を好意的に書評した。

ヒルファディングは以下のように主張する。「プロレ

タリアートの国際的団結は、一貫した平和政策とのみ合致しうる」(S. 265)のであり、これこそ唯一可能な正しい原則である。昨今戦争を革命と同一視して肯定する議論が見受けられるが、これは「欺瞞」である。戦争は確かに変革作用を持ちうるが、厳密な意味での革命手段そのものではない。かつてのブルジョアジーの上昇期には、戦争による国家権力の弱体化は、権力奪取や民主化の好機として利用された。だが今日では、「国家権力は途方もなく強大化」しつつある。そのことは軍事的権力手段のみならず、イデオロギーにも表れている。現に今次大戦では、「ロシアを除いて——誰も状況を民主主義的方向に政治的に利用しようなどとは考えず」(S. 266)、むしろ城内平和による全階級の団結が唱えられている。各国の党は、戦争を勝手に意味づけて正当化している。例えばドイツの党は、戦争の目的をツァーリズムの打倒に見、またフランスの党は「解放戦争」と見なし、中立国を味方に引き入れようとしている。

ヒルファディングによれば、ラコフスキはこうした各党の行動とインターナショナルの決議との矛盾を鋭く指摘している。インターナショナルは国防そのものを否

定しないが、だからといって国内の支配階級との闘争を停止してよいわけではない。我々の敵は、内と外と二様に存在するのである。我々の戦術は、国防サポーターに反対するとともに、戦争そのものに反対することである。戦時公債案の否認が兵士の士気を削ぐという主張は誇張であり、むしろ公債の承認こそインターナショナルの統一を破壊した。

ラコフスキーは党の道徳的崩壊の原因を、たんなる一時的誤謬でなく、根深い日和見主義的意識に求めている、とヒルファディングは言う。すなわち党は外敵を恐れたのではなく、むしろ有権者の喪失や組織の弾圧等を恐れたのである。しかも党内には、階級協調を説く修正主義がはびこっている。そして特にドイツでは、真の民主主義を気嫌いする下士官根性が存在する。まさに党の崩壊は、外敵の侵入といった外的要因によるのではなく、むしろ内的要因によるのである。結局「ラコフスキーは、今次戦争の担い手の中に、歴史的進歩の要因を見ることが拒否している」(S. 272)。我々はあくまで「古き良き」階級闘争戦術を堅持し、今後とも戦争と日和見主義に反対してゆく。

以上で見てきたように、ヒルファディングはラコフスキーの所説を好意的な紹介しつつ、戦争と党の関係を論じた。ヒルファディングは、戦争を革命と直結させて是認する考え方を欺瞞として退け、一貫した平和政策を主張した。その際は現代国家の巨大化を指摘し、かつてのような戦争を契機とした社会変革が容易でないことを示唆した。そして彼はラコフスキーに依りつつ、国防そのものを否定しないものの、国内の敵との戦いを重視し、城内平和でなく階級闘争の原則を堅持するよう主張した。今日の党の崩壊は、たんに一時的な誤りでなく、日和見主義や修正主義といった内的要因に基づくものであることが示された。

このようにヒルファディングは、戦争を革命と等置する立場を明確に批判したが、当時一部では、彼自身が類例の立場をとっていたかのような誤解がなされていた。例えばカウツキーは、『パターユ・サンディカリスト』誌がヒルファディングを「誤解」していることを指摘している。すなわち同誌は、ヒルファディングが帝国主義を革命的力として擁護しているかのように書いた。カウツキーによれば、ヒルファディングは確かに帝国主義を、

革命的な要因と見なしている。だがヒルファディングはそのことから、帝国主義を支持すべきだなどとは結論していない。「むしろヒルファディングは、帝国主義の革命的意義を次の点に見ている。すなわち、帝国主義はプロレタリアートにとってまったく耐えがたく、それゆえそれは、他のいかなる資本主義的政策よりも強くプロレタリアートを反資本主義闘争に駆りたてる」<sup>(7)</sup>。その限りで帝国主義は、ヒルファディングにとって「革命的」なのである。こうしたカウツキーの理解は、本稿のこれまでの論述からしても、妥当であると思われる。

ところで本節で見てきたヒルファディングの二論文は、いずれも書評の形をとっていた。それは、彼が戦時の言論規制の厳しさを考慮したことによるのかもしれない。現に一九一五年春の彼の『アルバイター・ツァイトウング』論文と、九月の『カンフ』<sup>(8)</sup>の論文「権力政策か民主主義か」は、発禁処分となった。彼は公に自由に自説を展開しえたわけではなく、第三者の所説を紹介する形で、間接的に自らの大戦観を提示せざるをえなかったものと推測される。

(一) R. Hilferding, "Sozialistische Betrachtungen zum

Weltkrieg", *Die Neue Zeit*, 33 Jg. 2 Bd., 1915.

(2) M. Adler, *Prinzip oder Romantik*, Nürnberg, 1915.

(3) Cf. Hilferding an Kautsky, 29. Juli 1915, Wien, Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis, Amsterdam, Kautsky Archiv, KDXII, 609.

(4) Hilferding, "Ein neutraler Sozialist über die sozialistische Neutralität", *Der Kampf*, 8 Jg., 1915.

(5) C. Rakowsky, *Les Socialistes et la guerre*, Bucarest, 1915.

(6) Hilferding an Kautsky, *op. cit.*

(7) Kautsky, "Imperialistische Tendenzen in der Sozialdemokratie", *Die Neue Zeit*, 34 Jg. 1 Bd., 1915, S. 100.

(8) Cf. Adler, *op. cit.*, S. 620, *Der Kampf*, 8 Jg., 1915, S. 305.

### むすび

以上の検討によって、第一次大戦初期のドイツ社会民主党内の論争状況と、そこにおけるヒルファディングの思想的立場の一端が明らかになったと思われる。彼は多数派と少数派の論争において、一貫して後者の立場から発言し、党執行部の戦時政策を批判した。開戦直後の二

度にわたる党委員会で多数派は、祖国擁護の観点から議員団の公債承認を肯定し、しかも組織維持を最優先する立場から、リーブクネヒトや『フォアヴェルツ』の「勝手な」言動を、組織規律等もっぱら形式面から批判した。

これに対して少数派は、戦争の性格規定など内容を問題にし、ベルギーの中立侵犯等、現実の政策と党の反併合の原則の矛盾を指摘して、多数派こそ戦前までの原則から逸脱していると反論した。少数派のヒルファディングは、労働者大衆の排外主義的傾向を認めつつも、それによって党執行部の責任が免罪されないことを主張した。彼は真っ先に戦争の原因を取り上げ、大戦が他民族支配のための帝国主義戦争であることを指摘して、反戦平和を説いたのである。そして彼は帝国主義と労働者階級の利害統合論を否定し、社会変革における労働者の主体性の意義を特に強調した。彼はまた『フォアヴェルツ』に関して、同紙編集部が民主的な意思決定を行っていることを付言した。

ヒルファディングは党委員会外では、検閲に抗して『フォアヴェルツ』の批判的論調をよく維持した。彼はまた同時期の議員団会議で、ベルギー中立侵犯問題や講

和提案、平和運動決議案を積極的に取り上げ、さらに大ベルリン執行部会議でも、大戦の帝国主義的性格をあらためて強調した。

ヒルファディングはその後オーストリアに移るも、同地の厳しい言論統制の中で、書評という形で間接的に、党のとるべき態度を論じた。彼は、帝国主義が租税負担や戦争の脅威など多大の犠牲を労働者に強いことを指摘し、そして戦争を革命と直結させて是認する見解の欺瞞性を暴露して、あくまで平和政策を追求するよう主張した。さらに彼は、党の崩壊の原因が修正主義等の内的要因にあることを明らかにし、階級闘争の原則に基づく党の再生を訴えた。

このようにヒルファディングは党委員会や議員団会議の場、機関紙の編集、さらには論文を通じて、戦争政策を鋭く批判した。その際、彼が誰よりも大戦の帝国主義的性格を問題にしようと努力したことが、彼の姿勢の特徴として看取されるだろう。大戦の本質をどのように把握するかということは、大戦に対する態度決定にとって、極めて重要であった。彼は、大戦が決して労働者大衆の利とならないことを示すことによって彼らの自覚を促し、

また党執行部にもそうした方向で活動するよう迫ったのである。

SPD内の多数派と少数派の対立は、以後戦況の推移や、国内の政治、経済的状况、大衆意識の変化等にもなって、ますます激化していった。それがついに党の分裂（一九一七年四月）にまでつながっていったことは、

周知の事実である。ヒルファディングはこの間ドイツ国外にあって、外から党の動きを見守らざるをえなかった。彼がその後の党内情勢、ドイツの政策の展開をどのように見たかは、今後の検討課題として残る。

（金城学院大学助教授）